Life is
BEAUTIFUL

# ふわり するり、

# かさり

AKUHEKI

# ふわり するり、かさり

## 紫月

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20973721**

ヒュンマ, ヒュンマCandyFes

手放すべきと解っている。
だけど、あともう少し。不甲斐なくとも、あと少しだけ—ー。

ダイを探す旅の途上。秘めたヒュンケルの恋心。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

2023年11月11日から12日にかけて、オンラインイベント「ヒュンマCandyFes」が行われました。
おめでとうございます＆いつもありがとうございます。
それに寄せて書かせていただいた話になります。
個人的に一年で一番好きな季節、晩秋。その季節の美しさを描きたくて書きました。
ちょうど一年前、旅先で見た枯れ葉の舞う光景。
風の音とも合わさって形容し難く美しく、いつかその景色を文章で留めたいと思っていました。
が、言葉でなしに感覚として胸に湧き上がった思い、それを言語化するのは、とてもとても難しかったです。
結果、初稿から何度も何度も推敲を重ねた本作ですが、自分の描きたかったものを果たしてどこまで表現することが出来たか……心許なくも思います。
そんな作品を読んでいただくこと、申し訳なくもありますが、
もし読んで下さった方の胸に涼やかな風が吹き、ああ、綺麗な景色だと思っていただけたらうれしいです。

ちなみに、推敲の間はひたすら静かなピアノ曲を聴いていました。

素敵な表紙はこちらからお借りしました。illust/77184765

# Table of Contents

# ふわり するり、かさり

1

「お前、どうしてまた、そんなものを読んでいるのだ」
すっかり眠りに落ちていると思っていたラーハルトから声を掛けられ、ヒュンケルは内心慌てた。若干気まずい思いで面を上げれば、横になったまま顔だけこちらに向けたラーハルトと視線がぶつかる。その面には、困惑や疑問と同時にうっすらとこちらを慮る気配も読み取れて、ああこの男は自分のことを心配してもいるのだなと理解出来た。
秋も半ばの夜のこと。数ヶ月の魔界の旅を経て、彼らは四日前に地上に戻ってきた。今、旅をしているのは温暖な地方であり、幸いなことに今夜は風もほとんど吹かず、辺りの空気は柔らかい。ぱちぱちと囁きながら燃える焚き火は空に向かってまっすぐに煙を吐き、厚手の毛布にくるまっていれば、そこそこ心地よい眠りが与えられていたはずだ。
消えた勇者を探す道の途中。屈強な男ふたりの旅は気楽なもので、余程天候が荒れでもせぬ限り、夜は野営をして過ごす。星空の下に横たわる日々にも慣れたものだが、油断大敵、万が一の魔物や野生動物の襲来に備え、片方は必ず火の番をすることになっていた。
今夜は、ヒュンケルが先に見張りを引き受けた。昼間、険しい岩山の峰を越えてきたこともあり、横になるやいなや、ラーハルトはすっと眠りに落ちていった。(どんな状況下にあっても身体をしっかり休め体力の回復に努めるのは、彼ら戦士にとっての常識である)。
こうしたとき、ヒュンケルの夜の過ごし方は様々だ。周辺の地図を眺めて翌日のルートを検討していることもあれば、各国王家から借りている古文書の類に目を通すこともある。時にはカップ一杯の酒で身体を温めながら、ただ星を眺めていることもある。
今夜は、そのどれとも違った。
焚き火の向こうとこちらに分かれていたとはいえ、彼が広げていた

本の表紙は、しっかりラーハルトにも見えたのだろう。あまりに意外な取り合わせに、かなりぎょっとしたのかもしれない。それを声音に出さずにいてくれるのは、冷静沈着な性格の故であるかもしれないし、あるいは友情の表れ、でもあるのかもしれなかった。
「いや……」
ヒュンケルにしては大変珍しく、意味もない相槌を打った。が、そんなものでラーハルトが納得するはずもないし、多少の気恥ずかしさはあるものの、別段咎められることをしているわけでもない。こほんとひとつ(これまた意味もなく)咳をすると、訝しげな眼差しのラーハルトに向かい、彼はなるべく淡々とした口調で説明を試みた。
「これは、ダイを探す何らかの手掛かりになるかもしれんと、旅の出発前に妹弟子から預かったものだ」
「妹弟子……パプニカの王女か？」
なるほど、どちらかといえばそちらの方が自然な発想かもしれぬと、ヒュンケルは妙な納得をしてしまう。
なにせ、焚き火の灯りの下で彼が広げていた本の表紙には、美しいドレスをまとった姫君の絵が描かれていたのだから——どこからどう見ても伝承や呪術の書籍には見えぬそれは、幼い少女が好みそうな童話の本だったのである。一国を預かる身となった現在でも愛読しているとは思えなかったけれど、レオナの寝室の本棚にそっとこれが並べられていたとしても、確かに不自然さは感じない。
しかし、事実はそうではなかった。
「いや。レオナ姫ではないんだが……」
「ほう。となると、あの武闘家の娘の方か」
肯定も否定もせずにおいたものの、レオナではない妹弟子といったら残りはひとりしかいないのだから、ラーハルトにも経緯は解ったことだろう。本当なら一言二言、述べたい感想もあったのかもしれないが、彼は賢明にもそれを呑み込み、話を本そのものへと移してくれた。
「しかしそれは、子ども向けの夢物語ではないのか？そんなものが、ダイ様の行方を知る何の手助けになるというのだ」
普通に考えれば、実にその通りではある。だが先程口にしたこと

は、照れ臭さが言わせた言い訳半分であるものの、全くの出鱈目というわけでもなかった。
「そう馬鹿にしたものでもないぞ。こうしたお伽噺というものは、世界各地に残る伝説を基にしたものも多い。その中には、古の時代には知られていた事実や、現代では失われてしまった知識が含まれていることもあるだろう。例えば天界と通ずる道などの、糸口が見付からないとも限らない。どんな頼りない方法だとしても、ダイを探し出すためには、オレたちは全力でありとあらゆる手段を試すべきだ——違うか？」
常とは違い、饒舌になっている自覚はあった。それが相手に不自然に映るであろうことも解っていた。
語るだけ語り、ばつが悪そうに黙りこむヒュンケルを、ラーハルトもまた黙ったまま、しばし見つめていた。やがて、その手立ての有効性はともかくとして、殊更害のあることでもないと判断したのだろう、フンと小さく鼻を鳴らすと、固く毛布を身に巻き直す。
「まあ……心掛けは立派なものだが、あまり根を詰め過ぎるなよ。明日はまた、深い森の中を探索するのだからな」
「ああ」
「交代までは、あと三時間ほどか？——時間が来たら起こしてくれ。湯を多少沸かしておいてもらえると助かる」
「解った」
おそらくは、目覚ましに濃い茶を淹れるつもりなのだろう。ラーハルトはこちらに背を向けると、完全に眠る体勢に入ったようだった。
しばらく友の様子を見ていたヒュンケルだったが、火の勢いが少々弱まっていることに気付き、木の枝を三本ほど放り込む。
ぱちん、ぱちん。炎の声を聞き、それから改めて膝の上の書物に目を落とした。
十数編収められた物語のうち真ん中辺りには、海の中に住んでいたという人魚の伝説が語られている。今ヒュンケルが開いているページではちょうど物語が佳境を迎え、うら若い人魚の娘が、自らの生命を賭した決断を下しているところだった。
しかしヒュンケルの目は、ドラマチックなクライマックスを捉えて

はいない。色素の薄い双眸が見つめているのは、本の間に挟まれた、紅い一枚の木の葉だった。

昨年の秋の終わりを思い出す。あれはもう、そろそろ一年近くも前のことになる。

2

大魔王との最後の戦いを終えてから、勇者の仲間たちは、消えたダイの姿を求めて世界中を飛び回っていた。だが吉報は届かないまま、何かしらの有益な手掛かりを得ることすらないまま月日は過ぎ、彼らの全員がこのまま勇者の探索だけに労力を割くわけにはいかぬ現実が立ち塞がってくる。仲間内には、指導者として各国の再建に力を尽くすべき立場の者もあったし、人々の前進のために役立つ能力の持ち主も多かったからだ。
もちろん、誰も諦めてはいなかった。けれど、これまでのように闇雲に世界を歩き回ればよいというものでもない。為すべきことを為し、それと並行するかたちで最大限に有効な手段を探っていくこと——最終的には、内心ではダイの帰還を誰より待ち望んでいるであろうパプニカのレオナ王女が下した決断に、仲間たちの誰も異議を申し立てることは出来なかった。
ポップは、その機動力と人脈を最大限に活かし、各国の折衝に尽力していくことになるらしい。傍ら、魔族との二度の大戦を経る中で得られた知識(魔法に関わる事柄が大半にはなるだろうが、それ以外にも貴重な経験のあれこれも)を後世に残すべく、学術施設の発足にも携わっていくのだと聞いた。これには、彼らの師であるアバンも大変に感銘を受け、最大限の協力を約束したのだという。
そのアバンは、カールでフローラと歩む未来を選びつつ、愛弟子同様に自身の知見を後世に書き残す仕事に忙しそうだ。占い師として人々を導くメルル、鍛治の修行を本格的に開始したノヴァ、パプニカで若き指導者を支える三賢者——皆が〝勇者の守った世界〟〝ひ

とりの少年が命懸けで愛した世界〟をよりよいかたちで繋いでいこうと、懸命に出来る努力を為していた。
そんな中、マァムもやはり自らの道を進み始めていた。
――ポップやレオナみたいに、これを成し遂げるんだって明確な目標が見えているわけではないの。
ある日偶然、大荷物を抱えてパプニカの城下町を歩いているところに出会った。聞けば、国内の僻地にある医療施設への救援物資を届ける準備をしているのだという。彼女の関心や能力は、大戦で心身共に傷付いた人々を癒すことに向いているようだった。最近では医療施設のみならず、親を亡くした子どもたちの養育機関であるとか、教育現場にも請われて行くことがあるらしい。
――何をすべきなのか、はっきりした道が見えないことに焦りを感じることもあるわ。みんなのように、ちゃんと為すべきことを見付けた上で、その目標に向かって邁進しなくちゃいけないんじゃないかしら、って。
手を塞ぐ荷を半分引き受け、帰りを送っていく道すがら、新鮮な果物をジュースにして売っている店があった。荷物運びの礼にご馳走をしてくれるというので、大したことはしていないと思いつつもありがたく心遣いを受け取ることにした。夏が戻ってきたように陽射しの強い午後で、冷たい水滴の付いたコップから飲む果汁は、うっすら汗ばむ身体に浸み入るようで美味だった。
――それを言ったら、オレも同じだ。戦士として役立てなくなった身で、何をすることが出来るのか。その答えは得ていないし、これから先にも得られるかどうか、自信などまるでない。
そもそも(一応の)平和が訪れた地上にあっては、戦いのプロフェッショナルの存在意義自体が失われていくだろう。もちろん師やポップのように、稀有な経験を後の世のために残していくことは可能だろうが、さてそれ以外に己の持つ力をどう活かしていけばよいものか、それは皆目判らない。
――大丈夫よ、ヒュンケルなら。あなたは、どんな苦境も切り開いていける強さのある人だもの。必ず、進むべき道を見出だすことが出来るわ。
そう励ましてくれながら、そこでマァムは苦笑いをしてみせたもの

だった。
——変なの。人のことならこんな風に言えるし、心の底から信じることも出来るのに。自分のこととなると、なかなか難しいものね。
——そうだな。
その通りだと思った。ヒュンケルにしてみても、少々不器用ながらも誠実に物事に当たる目の前の女性は、いずれ果たすべき自身の使命を見付けてくれるとの確信がある。
——人間とは、そういうものなのかもしれないな。自分のことは案外解らず、他者の目を通して少しずつ己を理解していくものなのかもしれない。
そうであるなら、世界の誰より信じ敬愛するこの女性からの『大丈夫』という言葉は、これからの時間を生きなくてはならない自分の、道標になってくれる灯火だと思った。
——……回り道もいいんじゃないか。一直線に目的地に向かう生き方も悪くはないが、遠回りをすることで見える景色もあるだろう。その道を歩むことでしか知ることの出来ない物事も、人生にはある。最近、そんな風に考えるようにもなった。
それは強がりでも気休めでもなく、実感だった。闇に落ち重ねてしまった罪の重さを忘れたことはないけれど、あの日々があったからこそ、自分は最後まで闘い抜ける力を手にすることが出来たのだとも、街を行き交う人々の笑顔を目にする今なら思える。
——そう……ね。あなたの言う通り、はっきり先が見えないままでもとにかく前に進むことで、やがて目指すべき場所というものも判ってくるのかもしれない。
そこでマァムは表情を緩めると、
——ありがとう、ヒュンケル。
と礼を述べたのだった。そして、カップの底に残っていた果汁を飲み干し、美味しいと心底うれしそうに笑うのだった。
そんなやりとりがあったからだろうか。ヒュンケル自身も、まずは行動してみようと思えたのは。
未来のことは判らない。がむしゃらにダイを探して歩くことが、効率的であるとも思わない。それでも各地を巡る中で、知れることもあれば、ささやかにでも人々の役に立てることもあるかもしれな

い。そして得た経験の幾ばくかは、いずれ彼が進むべき道に於いて、何かしらの糧となってくれるのかもしれない。そして、あるいは、もしかしたら。旅の途上で、ダイを見付けてやることが出来るのかもしれないのだ。
そう考え、ヒュンケルは再び出立することを決意した。
——オレも行こう。
思いを告げたとき、一も二もなく同行を申し出たラーハルトの真意は尋ねなかった。もちろん、主君であるダイに関わることであるなら自身が動かぬわけにはいかないとの、忠誠心が第一義ではあっただろう。が、おそらくはそこにヒュンケルへの友情のようなものも多少は含まれていたのではないかとも思われる。
——今のお前をひとりで行かせて、野垂れ死にでもされたら寝覚めが悪い。
言葉は素直ではなく、ラーハルトらしく冷めてひねくれたものではあったけれども。

出発を二日後に控え、パプニカ城に王女を訪れていたヒュンケルが再びマァムに出会ったのは、季節が冬へと移り変わろうとしているころだった。
大まかな旅のルート——ラーハルトとふたりでの身軽な旅であるから、魔界に通ずる危険な箇所も含んではいた——を告げ、レオナから十余りのキメラの翼を渡された。月に一度は、報告と安否確認のために顔を出すようにと念を押され、後者の方はやや煩わしくも感じたものの、前者に関しては尤もな要請であると納得し、素直に諾と答えを返した。回復役を伴わない旅路である。内心は他にもあれこれ言いたいこともあったのかもしれないが、姫はそれ以上のことは口にせず、兄弟子に全幅の信頼を示してみせた。
謁見の間を出て廊下を進み、しばらく行った先を曲がると、警備の兵士の目も届かなくなる。そこまで来てヒュンケルは、小さなため息を吐くと、目を閉じて眉間をぎゅっと揉んだ。
レオナは、痩せた。
強い女性である。ダイの行方のことばかりでなく、若くして肩にのし掛かる国政の重みも、表情や言動に滲ませることはない。今だっ

て、冷静にヒュンケルの言葉に耳を傾け、旅の安全を願う言葉と共に彼を送り出してくれた。非の打ち所のない王者の風格だった。
しかし、かつて自身も一団の上に立ち様々な責任を背負った経験のあるヒュンケルは、言葉では表現出来ないぴんと張りつめた糸のようなものの存在を、肌で感じ取ってしまう。
彼女から頼れる父王を奪い取り、今日の重責を背負わせた一因は、間違いなく自分にもあるのだ。仲間たちと共に生き抜いた日々を越えた今、自らの生命で罪を償えばよいなどという、安易な考えは捨て去っていた。けれどそうであるなら他の手段で以て、そして自身に出来る全力で以て、あの姫の助けとなる道を模索しなくてはなるまい。正直、ここから始まる探索の旅路に於いて、ダイを見付けられる保証は何ひとつなかった。それでも、一歩でも二歩でも前進し、何らかの有益な情報を得て帰らねば。
その午後は、城下町で旅に要り用なあれこれを買い求めるつもりでいた。(特に回復アイテムの類は、しっかり整えておく必要がある)。だがレオナとの会見を終えたヒュンケルは、疲れのようなものを感じていた。どこかしら暗い思いを抱えたまま、賑わう街に出たくない。ここでしばしパプニカの風景を目に焼き付けたところで、買い物は明日までに済ませれば事足りる。
少し、庭でもぶらついてみよう。そうこうしているうちに心が落ち着いてきたならば、その足で街に向かえばいいことだ。
少々言い訳めいた思いを巡らせながら、王宮を出て、穏やかな陽射しに溢れる空の下に立つ。
なにせ、魔族との戦いから数ヶ月後のことだ。城下町ばかりでなく、宮殿のそこかしこにも瓦礫が積まれ、戦争の残酷な爪痕を見せつけてくる。パプニカ王女は国の復興に当たり、まずは医療施設や人々の住まうところを最優先に整備していた。同時に荒らされた農耕地を整えるため、多くの働き口を設けてもいる。戦火の中ですでに多くのものを失った人民が、食べるものや住む場所に事欠き、明日を生きる希望までを失ってしまうことのないように――結果、国の象徴でもあるパプニカ王城の再建は、二の次三の次になっているのが実情だ。
とはいえ、政の中心地であり要塞としての役目も果たす場所である

から、王宮はそれなりに修繕され、最低限の体裁は整いつつある。一方、かつてはさぞ美しかったであろうと思われる庭園や離宮は、危険のない程度に整えられるに止まり、無惨な姿を曝していた。今ヒュンケルの眼前にも、すっかり乾いて崩れた噴水の跡があり、ぼうぼうに荒れた草ばかりが生命力に満ちて、悲しい。
その光景は、自身が犯してしまった罪を突き付けてくるものでもあった。また、前庭に当たるここには、兵士や、王家への陳情に登城する市民の姿もちらほら見える。つまりここは、ヒュンケルにとって決して心安らぐ場所ではないのであった。同時にパプニカ国民の中には、彼の存在を目にすることで心を激しく乱される者もあるだろう。
それらの理由から、ヒュンケルの足は自然、王宮の裏側に向かうこととなった。裏門の外には当然警備があるものの、裏庭そのものに訪れる者は滅多にないことを知っていたからだ。
自然主義、とでもいうのだろうか。人工的な手が多く加えられた正面の庭と異なり、裏庭からは徹底的に直線や対称を用いた意匠が排除され、一見して天が創ったままのような景色がそこにはある。そうはいっても、一国の王城が抱える庭だ、実際には危険なものや醜く荒れた要素は排除され、ゆったりと散策が楽しめるように計算されていた。そういえば以前、城で働く人々の会話の中で、ここは〝思索の庭〟と呼ばれていた記憶がある。なるほど、例えば政治の諸々に悩んだ者が心を静めて物事を考える際に、ここはなかなか適した場所である。もしかしたら時折レオナも、そしてかつてはその父王も、ここで己を見つめ直す時間を持ったのかもしれなかった。
ホルキアの温暖な気候を反映し、植えられている樹は広葉樹が多い。結果、この時節には、地面は土が見えないほどの大量の落ち葉で覆われていた。人ひとり見えない空間で、ヒュンケルの爪先が蹴り上げる枯れ葉のかさかさいう声と、木々の梢を揺らす風の音だけがかすかに響く。
かさっ、かさ。かさり。
やがて前方から、小さく水音が聞こえてきた。
実は前も一度この庭を訪れたことがあったので、この先にはささやかな小川が流れていることを知っていた。おそらくは人間の手で造

作されたものなのだろう。しかしひょっとすると、元々この地に
在った水の流れを利用して後から庭が設計されたのかもしれない。
とても優しい佇まいの川で、周辺のちょっとした岩肌も心落ち着く
様を見せていた。
単調なようでいて実は複雑な自然の織り成すリズムは、知らず人の
心を和ませる。特に深い考えがあるわけでもなく、ヒュンケルの足
はふらりと小川に引き付けられた。
そこで、思いがけず人影を見付けた。
「ヒュンケル」
先に声を掛けてきたのは相手の方で、川縁から少し離れた場所で腰
を下ろしている。そこには景観を損なわないように、伐った樹を横
倒しにしたようなベンチが設けられていた。
「あなたも、散歩？」
とりたてて靴音高く歩いていたわけでもないが、気配を消そうとい
う意識も全くなかったから、多分、こちらの存在には、足音で気付
いていたのだろう。マァムは驚く素振りもなく、にこにこと彼を見
上げてくる。
「散歩といえば散歩なのかな。特段目的もなく、少しふらりとした
くなっただけだから——お前もか？」
「そうね、ちょっと一息つきたくなって、あまり人のいなそうなと
ころを探してきたの。ふらふらしているうちに、ここを見付けた
わ。綺麗ね、ここ」
言いながら彼女は、腰の位置を丸太の端に移す。その分空いたス
ペースに座るようにとの意図なのだろう。逆らう理由もないので、
ヒュンケルは素直に彼女の隣に腰掛けた。正面を向くと、重なり
あった枝葉の間から、水面がきらきらと乱反射している様子が見え
る。美しい光景だった。
「そうか。すまなかった、ひとりの時間を邪魔してしまったのでは
ないか？」
「まさか。邪魔でなんて、あるはずないじゃない。
今日はレオナのところに来ていたの。久々に会えたのはうれしかっ
たけれど、お城の中って緊張しちゃうし、少し疲れただけよ——な
んて、たまにはぼーっとしたくなっただけ。ヒュンケル相手に気を

張ったりなんてしないもの。だから、大丈夫」
マァムにしてみれば、思ったままを無邪気に口にしているだけのことなのだろう。しかし信頼しきった眼差しと相まって、その言葉がどれほどヒュンケルの胸を揺さぶっているのか、おそらく彼女は全く知らない。強くもあるが、時々無理をしたり心を殺したりすることもある妹弟子。その相手が、自分の前では安心して心を開放しているのだと聞くと、思い上がるなと自重する声を押し退け、じわじわと歓喜の思いが湧き上がってもくる。
もっとも、そんな内心を表情に出しはしない。
「オレも、姫に謁見してきたところだ。お前と会った後だったのかな」
「そうね、何も言ってはいなかったけれど、そうかもしれない」
「前以て約束していたわけではなかったんだ。急遽申し込んだことだったから」
「そうだったのね——ラーハルトとまた旅に出るって聞いたわ。その話？」
どうやら彼女は、すでにヒュンケルの決断を耳にしているらしい。ヒュンケル自身もラーハルトも、そうぺらぺらと自分のことを吹聴する性格でもないが、今後の予定についてあちらこちらと折衝するうちには、別段隠すこともなく計画のことを話してはいた。マァムは、ポップか、あるいはアバンあたりから話を聞いたのだろう。
「ああ。現状、どこかの国に留まったところでオレに出来ることなど限られているし、それならば少しでもダイの行方を追う手掛かりを見付けられればと思ってな。その途中で各地の様子を見て回り、パプニカやカールに報告することで、復興に役立てることもあるかもしれない」
「あなたがレオナや先生のところにいてくれたら、助けになることが限られているなんてことはないと思うけれど……でも、そうね。ダイのためにも世界のためにも、色々なところを巡ることは、あなたたちだからこそ出来ることなのかもしれないわ」
そこまで言うと、マァムは一度口を閉じ、それから意を決したように
「……魔界にも行くのでしょう？」

と問い掛けてきた。
「……そうだな。かつて魔に近い場所で暮らしたオレと、魔族の血を引くラーハルト。魔界を旅するのには最適な人選だと思う。もちろん、探索は魔界に限ったことではない。地上にあっても、まだ充分に調べきれていないところを訪ねてみようと思っている」
妹弟子は、ふっとひとつ息を吐くと、視線を自身の膝に落とした。ちょうどそのとき、彼らの頭上に枝を広げた樹木から一枚の葉が舞い、彼女が広げた書物の上に落ちたところだった。マァムはそれを摘まみ上げると、指先でくるくると弄ぶ。それは幾分幼い仕草であったけれども、彼女は熱中している風に振る舞った。
「付いていけたらいいのだけれど……戦力としてはあなたたちに及ばないにせよ、自分の身くらいは守れるし、回復役としては役に立てるのに」
彼女と共に歩む旅路。それは随分と甘くヒュンケルを誘惑する提案だった。いや実は、今、彼女から言われるより前に、彼もまたそれを考えたことがある。
しかし、危険も伴う旅である。そしてまた、魔界はヒュンケルの過去も想起させる場所でもあった。大魔王バーンの支配下にあった土地。そこでは、過ぎ去りし日の不死騎団長の名は、地上以上に轟いていることだろう——恐ろしい実力者としても、裏切り者としても。
彼女には、そうした現実を見てほしくなかった。
「……大丈夫だ。姫からは、かなりの数のキメラの翼と支度金を渡された。月に一度は顔を出すように約束したし、回復アイテムの類の準備も怠らぬように言われている」
「想像出来るわ。レオナらしい」
くすくすと笑いながら言うマァムの脳裏には、おそらくは〝約束した〟というより〝させられた〟兄妹弟子のやりとりが描かれているのだろう。事実、キメラの翼はともかく、金に関しては徹底的に辞退しようと試みたヒュンケルに、それは半ば押し付けるようにして渡されたものだったのだ。そう長い付き合いでこそないものの、聡いレオナはヒュンケルの性格を実によく理解している。そうした経緯で手にした金であれば、充分過ぎるくらいの回復アイテムに変え

ないわけにはいかない彼の律儀さを、彼女は上手く利用した、ということだ。
「そうね……あなたとラーハルトだもの。並大抵の危険なら問題もないでしょうし、ダイのためにも、待っている私たちのためにも——ちゃんと無事に戻ってきてくれる、わよね？」
寄せられる信頼に嘘の香りはない。だが、それでも言葉の端々に不安の気配が漂うのは、これまでに散々心配を掛ける無茶をしてきた己の責任なのだろう。再会の度に、そういえば自分は彼女を泣かせてばかりだったと、ヒュンケルは甘い痛みに襲われる。
ダイを探す過程で、仮に多少の危険を冒す必要が生じたなら、そうしないと言い切る自信はなかった。けれど、弟弟子を取り戻す代わりに兄弟子を喪うことになれば、目の前のこの優しい女性は、結局は涙を乾かすことが敵わないのだろう。まっすぐに光の中を生き、地上の人々を救った勇者と、昔日の罪にまみれた男。同等の価値があるなど、これっぽっちも思えなかったが、おそらく彼女にとってはそれぞれがかけがえのないひとつひとつの存在であるのだ。
「……ああ」
ふと、どことも知れぬ小さな町から、生還を報せる手紙を出す自分の姿が思い浮かんだ。居所は明かさぬまま、オレのことは心配しないでくれとだけ綴られた便り。
「きちんと生きて戻ると約束しよう。だからお前も安心して、自分の道を前に進んでくれ」
元来、軽々しいことを言える性分でもない。加えてこの女性には、心の一部を隠すことが精一杯で、どうしたって嘘は吐けないヒュンケルは、今の彼に伝えられる精一杯だけを唇に乗せる。
マァムの頬に、一瞬翳りが差したように見えた。が、ヒュンケルが目をしばたたく間にその顔には微笑みが満ち、彼女はうん、と小さく頷いた。
「私も、頑張らなくちゃ」
正面を向き直ると、どこか子どもの悪戯じみた動きで、彼女は足元の枯葉を蹴り上げた。
「あのね。私、レオナやロモスの王様に頼まれて、あちこち顔を出していたでしょう？病院だとか、孤児院だとか」

「ああ」
話の流れはよく見えなかったが、ヒュンケルは相槌を打ち、彼女の言葉に棹をさす。
「どの国も今、まずは壊れた街を作り直して、住むところと食べるものを確保するのに精一杯だわ。それはもちろん第一に考えなくちゃいけないことなんだけれど、それだけじゃなくてね、戦争が終わっても苦しんでいる人たちに寄り添うことも大切なんじゃないかしらって。
怪我をした人たちは、身体だけじゃなくて心も傷付いている。頼る親を亡くした子どもたちは、尚更よ。どんどん綺麗になっていく街を見ながら、自分だけが未来に向かえず取り残されてしまうような感覚を味わっている。そんな気がするの。
そうした人たちに、希望を持ってもらえる手伝いが出来たらって、最近そんな風に考えるようになったわ。一国の王様みたいに大きなことは出来ないけれど、例えば小さな子どもたちに文字を教えたり、胸の内を吐き出したいと思っている人たちの話を聞いたり。そんなことは、私にも出来るんじゃないかって思うのよ」
マァムの表情は、一見、煌めく水面に見惚れているようにも映った。しかし彼女の視線の先にあるのは愛らしく心和ませる小風景ではなく、ここしばらくに出会った人々の面影であったに違いない。
なるほど、彼女が語るあれこれは、確かに目に見える再興とは異なり、ひとつひとつはささやかで地道な仕事であるのかもしれなかった。けれどいくら街並みが美しさを取り戻しても住まう人々の心が闇に閉じ込められたままでは、それは真の幸福、つまりは真の平和の再来にはならないことは、ヒュンケルにも実にその通りであると感じられる。そしてまた、口にすれば簡単に聞こえることではあるが、〝人に寄り添う〟ということには正解も終わりもなく、むしろ困難な道であること。誰にでも出来ることではないし、生半可な決意で取り組めることでもないこともよく解る。
マァムになら、可能だろう。
「そうか。大変な道ではあると思うが、目を逸らしてはいけない大切なことだな。もしかしたら、迷うことや悩むこともあるかもしれないが……それでも、お前ならやり通せるはずだ。頑張ってくれ」

「ええ」
ひとりの力で出来ることには限界がある。このとき彼女が思い描いていたのは、自らが人々に向き合うと同時に、同じ志を持つ仲間を集め、問題解決の方法を共有していけないかということであったのだが、それはまた別の物語である。
「あなたやポップやレオナや……みんなに恥じないように、一生懸命やってみる。
だから、あなたも気を付けてね。次に会えたとき、こんなことを頑張ったんだって、色々聞いてほしいから」
咄嗟には返事が出来なかった。沈黙の降り注ぐ中、マァムに倣って前方の景色に視線を飛ばす。
ざざざざざっ――。
梢を揺らして、風が走った。

辺りの風景が、白い光に溶けた。そこにあったはずの小川も木々も姿を消し、それどころか、自分自身も隣のマァムのかたちも見えなくなった。
何故か唯一視界に在ったのは、舞い落ちる木の葉たちの色。それらは随分と遠い空を思わせ、暁のように染まり、あるいは昼の眩しい光に似て、はたまた星が現れる直前の侘しく胸が空洞になる瞬間をも思わせるものだった。
色も形も、ひとつひとつが微妙に異なるものたちが今、ヒュンケルの目の前をゆっくりと大地へ還っていく。
裏を表を見せながら、あるものはひらひらと、あるものはくるくると。どれもに共通しているのは、午後の陽光を浴びたそれらが、煌めきを放っていることだった。
訳も解らぬまま、ヒュンケルは喉の奥が焼けつくような切なさに捕らわれる。
木の葉たちは、時に雨に打たれ時に強風に煽られて、それでも空の青さに息を呑むこともあっただろう。枝に訪れる鳥が唄う物語に耳を傾け、はるか遠い地に咲く名も知らぬ花を、夢に見たこともきっとある。降る星々を見上げては、時の流れの深淵を覗き、自らの来し方行く末を思った夜もあっただろう。

今、地上に別れを告げ、この惑星を形成するひとかけらに戻る彼らが、最期に叫んでいるものは何か。
哀しい声には聞こえない。何故だかそれは、最大級の愛の讃歌に思えてくる。
——出逢えた一時は、永遠と同じだけの重みを持っていたのです——
——また、逢いましょう。いつかの未来に芽吹いた春に、違う身体で、同じ心で——

ね。
身体の奥から涌き出たように思えた声が、実際に耳朶をくすぐっていたのだと、気付くまでには一拍が要った。
「ね、出発はいつ？」
横を見遣れば目線が交わることはなく、マァムは相変わらず川面を眺めているようだった。不自然なくらいに頑なに、絶対にそこから目を逸らさないと決意しているかのような横顔だった。
「——明後日の、早朝に」
「——そう。明日から一週間、ロモスの王様に頼まれたことがあって、あちらから動くことが出来ないの。だから、見送りは今、済ませるしかないのね」
淡々とした語り口ではあった。けれど不意にその横顔が、かつて幾度か経験した別れ際の彼女の表情を思い起こさせ、ヒュンケルの胸を締め付ける。いつだって彼女は、離れるときには涙を見せなかった。それを許すのは再会のときだけなのだと、まるで自身に課しているかのように。
「気を付けて行ってきてね」
「ああ……ありがとう」
「そうだわ。これ、お守り代わりに持っていってくれないかしら？」
言いながら彼女は、膝の上に開いていた書物の表紙をぱたりと閉じた。そのまま身体を斜めに傾け、小さく微笑んでそれを差し出す。
「荷物になっちゃいそうで、申し訳ないけれど」
「いや、それは大丈夫だが……これを、オレに？」

手のひらに余る程度の大きさは携帯の邪魔になるとまでは思えなかったが、表紙を飾る絵を見て、思わずヒュンケルは疑問を発する。そこには、長い金髪を揺らめかす、青いドレス姿の女性が描かれていた。
「ごめんなさい。今あなたに渡せるものが、これくらいしかないの。確かに中身はちょっと子どもっぽくて、昔話の童話なの。あなたには似合わないものだと思うのだけれど――」
彼女が語るには、子どものころに好んでいた話が収録されているのがうれしくて、街の書店で見付けたときに、ついつい手に取ってしまったのだという。話しているうちに照れ臭くなってきてしまったのだろうか、ほんのりと頬を赤く染め、それでも、昔話や伝承の類には古の時代に失われてしまった知恵が含まれており、何らかの旅の手助けになるかもしれないと力説した。
素直なところは、マァムの美点だ。裏を返せばそれは嘘を吐くのが苦手ということであり、聞いていたヒュンケルには、彼女が自分の言っていることを全く信じていないことが解った。
それでいて、これを彼に持たせようとしている意味とは？思い至り、胸が押しつぶされる心地がした。
それは、いつかこの本を彼女に返すため。マァムの甘い思い出に繋がる、大切な書物を。であるからには、彼は生きて無事に戻ってこなくてはならない。そして、彼女の前にまた立たなくてはならないのだ。それが果たしていつになるのか、その約束は出来なくても。
自身の語る方便に、今やマァムの顔は真っ赤な熱を発している。その中でやや潤んで見える双眸が、怖いくらいに真剣だ。
ヒュンケルには、拒めなかった。
「解った。これは、ありがたく借りていくことにしよう」
「ありがとう。我が儘を言って、ごめんなさい」
「謝ることではないだろう？それに、礼を言うべきはこちらの方だ」
そう言えば、マァムはようやく自然な笑顔を見せてくれたのだった。
会話が途切れ、ふたりはまた、押し黙ったまま晩秋の光景に見とれる。風が冷たさを増し太陽が姿を隠すまで、この季節はあっという

間だろう。身体が冷えるから帰った方がいい、そう告げなくてはならないまでに、時間はあとどれくらい残されているのだろう。
きっとそれは、もうそう長くない。それまでの一瞬一瞬を、一秒たりとも忘れたくなかった。

3

縋る願いを神は聞き入れてくれたのか。あの日のやりとりは今も消えることなく、ヒュンケルの胸に宿り続けている。
それでいて、時の流れは否応なしに思い出の多くを過去へと封じ込め、あのとき感じていた様々なことは、現実感をなくしてまるで夢の中での出来事だったようだ。例えば、川を渡って吹き寄せていた風の温度や、落ち葉を受け止めた大地が放っていた匂い。あれから旅を続ける中で似た経験を得ることがあっても、それはどこか記憶の中のものとは異なり、あの一時にだけ与えられた特別なものだったのだと痛感せずにはいられない。
人はこうして、たくさんのものを忘れ失いながら、未来へ歩いていくしかないのだろう。
けれど、何もかもが消えてしまうわけではない。
栞のようにそっと挟まれた、枯れ葉に見入る。
マァムは、しばしこの本を開いたまま話をしていた。おそらくこれは意図的に置かれたものではなくて、頭上から舞い降りたもののひとつが、気付かれぬまま偶然に挟まれてしまっただけのことだったのだろう。自身で作ったことこそなかったが、押し花や押し葉の知識はヒュンケルにもあった。各地を訪ね歩く月日の中で、これは少しずつ水分をなくし、土に還ることも敵わずここに在る。
憐れで寂しげで、ヒュンケルだけしかその存在を知る者はない。潤いを失して、もはや死以外に向かう場所はなく、なのに朽ちることも許されず――それでいて、紅い。まるで何かしらの激情を、迸る想いを、全身が燃えるに似た熱を留めて、紅い。
その存在に気付いたとき、ヒュンケルにはそれを捨てることは出来

なかった。
それはまるで、彼の想いのよう――柔らかな陽だまりを思わせる面影はいつの間にか音もなく胸に忍び込み、誰に気付かれることもないまま今も、彼の全身にひっそりと残像だけを留めている。恋心は消えることなく、ただ時の流れから取り残されてどこに行くことも出来ずにいる。
いつかこの葉を大地に還すときも来るだろう。意識もせぬまま失してしまうのか、自らの手で葬るのかは判らない。
ひとつだけはっきりしているのは、小さな小さなその存在も崩れた後には、やがて春に芽吹く花の養分になってくれるということだ。
ヒュンケルの想いもまた、姿形を変えて、美しく咲く花を遠くから見つめることだろう。そう、ありたい。
けれど、今はまだ。
もう少しだけ、誰も知らない儚い一葉を愛でていても許されるだろうか。自分にはまだ、これを手放す勇気は持てそうにない。
風が野営地を駆け抜け、周囲の木々の枝を揺らす。思い出の景色と同様に、多くの落葉がその風に踊る。
地上には、叶わぬ夢がこんなにもある。
皮肉なものだ。だからこそヒュンケルは、この上もなくこの地を愛せるようになった。口に出せない共感を伴って。
押し葉を書物の間に戻し、壊さぬようにゆっくりと表紙を閉じた。
ぱちりと微かな音を立て、薪が爆ぜる。煙の昇る先を見遣れば、秋の星座がかそけく瞬く。それらは夏や冬に比べて明るい星が少なく、地味であるのだそうだ。かつて師から教えられた、そんな話を思い出す。
――それでもね、個々の星座に伝えられる物語は、やはり美しいのですよ。
何故だろう、そんな何気ない呟きが追憶の彼方から聞こえてきた。
――それはね、
時に甘く、時に悲しいそれらは、
――どれもが、懸命にもがき生きたものたちの物語なのですから。

終